

高機能都市と耐震化

名古屋大学 福和伸夫

現代社会は物質的に大変豊かで便利になりました。大都市には、高速道路や地下鉄網が縦横に張り巡らされ、中心街には高層ビルが、郊外の駅前には高層マンションが建っています。自宅と職場とを高速に走る鉄道で往復し、オフィスやマンションの中を高速のエレベータで移動しています。住宅やオフィスの中には便利な電化製品や大きな家具が溢れています。リモコンスイッチを押せば電気やテレビがつき、蛇口をひねればお湯が出て、洗浄機付き暖房便座で用を足し、インターネットで簡単に情報検索やメールができる便利な時代になりました。

ですが、便利な社会は、災害には脆い社会でもあります。もしも交通機関が止まれば、長距離通勤の人たちは、帰宅ができなくなります。エレベータが止まれば、上層階で働いたり、生活することは難しくなります。私たちの生活を支えている電気・ガス・上下水道などが使えなくなると、生活そのものができなくなってしまいます。まさしくこれらは命や生活を守るライフラインです。また、当たり前のように使っている電話やインターネット、携帯電話が使えなくなったら情報のやりとりができなくなってしまう不安になることでしょう。

一昔前には、職住近接で、家の周りには田畑や川や池があり、普段の生活では、ランプ、かまど、井戸、汲み取り便所を利用し、徒歩で移動をしていました。こういった時代には、帰宅困難問題もなく、ライフラインに頼ることもありませんでした。また、情報交換を行うときには必ず人と人が直接触れ合っていました。

現代社会は、高機能化・高効率化した社会を作るために、中央集約型、相互依存型の社会を作ってきました。大事なものが一部の地域に集中しています。また、火力発電所や大規模工場も都会に近い埋立地に集中して立地するようになりました。このため、これらの場所が被災するとその被害は広域に波及します。

これに対し、かつての日本では、それぞれの地域ごとに自給自足していましたので、他の地域での災害に影響されることは余りありませんでした。

また、個々の家庭も 3 世代が同居する大家族が多く、年寄りと若者が助け合うことができていました。災害時には若者が年寄りを助け、平時は年寄りが若者をしつけ、過去の災害教訓を伝承していました。また、農耕社会では地域での共同が生活の基本になっていました。また、かつては自然は怖いものであることを知り、個々人の逞しく生きる力も強かったと思います。

核家族化し、災害に弱い人の単独世帯が増え、地域社会の助け合いの力が弱くなり、自然の怖さを忘れてしまった現代社会とはずいぶん違います。

このように、現代社会はずいぶん災害に弱くなっているように思います。社会のソフト面が弱くなったのであれば、都市のハード的な強さを増すしかありません。そのために必要なのが都市の耐震化です。